周辺からの記憶 32

# 2019 年岩手・福島

村本邦子（立命館大学）

7 月、国書刊行会から『周辺からの記憶: 三・一一の証人となった十年』を出版した。本連載とは違うが、このタイトルが気に入っているので、そのまま使った。書き方は違うが、もちろん経験してきたことは同じである。一昨年、『対人援助学研究』にエスノグラフィーの記録をショートストーリーとして編集してまとめたが、今回は、その時の文字数の倍を見開き 1 頁と決め、読み切りの形とした。結果、エッセイ風になった。

長期にわたって書き溜めたものをどのように編集しなおすかはチャレンジである。今回は、お世話になったたくさんの方々のことを扱っているだけに、何かご迷惑をおかけするようなことがあれば大変だと気がかりもあった。それでは何も語らなければいいかと言えば、それも違う気がする。悩ましいこともいろいろあったが、とりあえず、昨年のコロナ禍で生まれた時間を最大限活かし、何とか形にした。

お送りした方々からは、肯定的なフィードバックを頂き、また、2021 年 8 月 21 日の朝日新聞にとても良い書評を載せて頂いた。多くの方に読んでもらって、一緒に東北のことやこれからの私たちのあり方について考えてもらえたら嬉しい。

プロジェクトもいよいよ最終年度を迎えている。最後をどんなふうに結ぶのか、ここまで続けてきたものを、今後どのような形でつなげていくのか、まだまだ検討が必要である。

周辺からの記憶 三・一一の証人となった十年
村本 邦子〈著〉
国書刊行会 2420円
「小さな物語」重ね希望を照らす
評・大塚 元

三陸鉄道に乗って

今年の 3 月、三陸鉄道の北リアス線と南リアス線が全線つながったので、「乗りたい！」と思い、計画を立てていた。2013 年、初めて宮古を訪れ、駅舎で職員さんたちのお話を聞かせて頂いて以来、すっかりファンになってしまったのだ。ところが、台風 19 号による被害で再び運休となり、本当に残念でならない。地元の方々、開通に努力された方々の失望はどれほどだろう。あらゆることについて、似たような状況が起きているに違いない。

とりあえず、乗れるところだけでもと現地に行き、JR 気仙沼からスタートした。まずは BRT で大船渡まで行く。BRT とは、バス高速輸送システムといって、線路を走るバスだ。東日本大震災の被害を受けた気仙沼線、大船渡線で開通した。JR の駅から出発して、線路をバスが走る。普通のバスだし、時々、路上も走るが、走っているところと踏切との関係が不思議で、なんだかおもしろい。

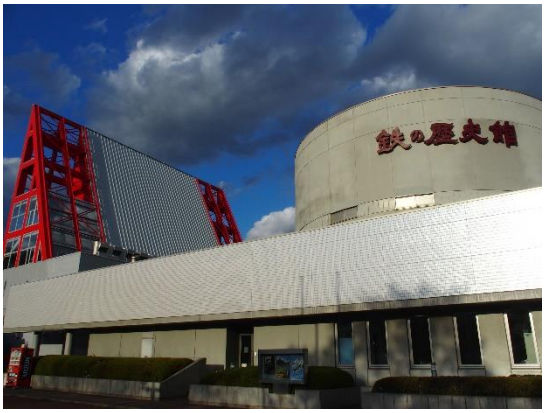
大船渡では、恒例のように、ポルコロッソでイタリアンを食べる。

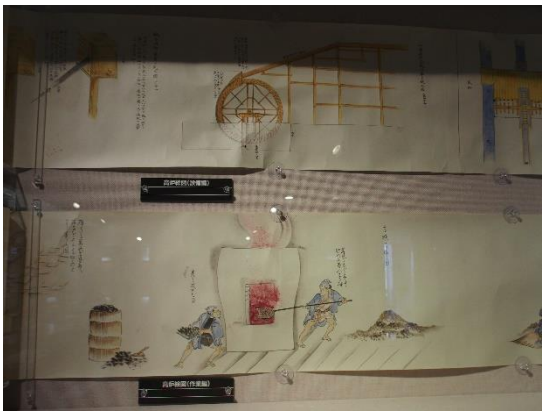
JR大船渡駅と隣接する三陸鉄道盛駅から釜石まで三陸鉄道に乗る。

9つの駅を通るが、観光スポットとなっている恋し浜駅ではしばらくの間停車し、乗り降り自由となっている。待合室には地元「恋し浜ホタテ」の貝殻の絵馬がたくさんぶら下がっている。

平田駅（へいた）が近づくと、釜石大観音と平田湾が見えてくる。そうするとあっという間に釜石だ。ここから宮古までが運休となっているので、バスに乗るが、バスまでの待ち時間がかなりあるので、これまで何度も通り過ぎていた釜石大観音へ行ってみることにした。

釜石大観音は、高さ 48.5m の鉄筋コンクリート造りで、観音は腕に魚を抱いている。内部は 13 階に分かれ、本尊の魚籃観音や三十三観音、七福神胎内めぐりなどがあり、12 階は展望台になっている。海難等で亡くなった方々を導くため海の方を向いているそうだ。展望台から臨む釜石湾は美しかった。





それでもまだ時間があったので、釜石鉄の歴史館を見る。鉄づくりの始まり、日本に伝わってきた鉄の文化、洋式高炉が完成に至るまでの道のりから製鉄に関わった人々、生活に欠かすことのできない鉄の今日までが紹介されていた。歴史の勉強になった。

バスで宮古へ。改札を待っている人たちと、再度の運休を嘆き合う。みんな無念の思いは同じだ。それでも、何年か前に乗った時には、山田の道の駅でバスを乗り継がなければならなかったが、今回は直通で宮古まで行くことができた。少しは便利になったということだろうか。

夜、いつものすし屋で皆と合流、打ち合わせをした後、院生企画で浄土ヶ浜ナイトウォークのツアーに参加した。男性ガイドの案内で、懐中電灯と杖を持って海岸沿いの遊歩道を歩く。月齢１で雲も少なく、絶好の星空ウォッチングだということだった。みんなでベンチにあおむけに寝て、夜空を見上げる。目が暗闇に慣れるにつれ、星がどんどん増えていった。星の光に包まれ、世界と一体になった。

11 月 2 日　漫画展と漫画トーク

今年は、魚菜市場とイーストピアみやこ市民交流センターの二ヶ所での漫画展開催となるため、朝、魚菜市場に足を運んだ。魚菜市場は改装され、出入口も自動扉になっていた。市場の半分に生協が入り、市場らしさは半減していた。

いつものようにきれいに漫画が並べられ、感想ノートには、「一介の観光客です。たまたま入ったこの場所で思いがけなく、心に迫る漫画を見せて頂きました。ありますね、こういうこと、という、よくある。しかし、深い世界。人の心の世界。ありがとうございました。宮城県より」「毎回楽しみにしています。いつも考えさせられることがいっぱいです。ありがとうございました。」などの声が寄せられていた。今年も魚菜市場で開催できてよかったなと思う。

それから、イーストピアに向かうが、途中、あちこちの側溝に台風の爪痕が痛々しく残っていた。

駅に隣接するイーストピアみやこ市民交流センターへ行くと、台風 19 号のボランティアの集合場所になっていて、たくさんのボランティアがいた。救援ボランティアの受入初日だという。ボランティアの人手が足りないと聞いていたので、人手になった方がいいのかもという気持に一瞬駆られるが、当初の予定どおり、いろいろなことがあっても細々と続いていく日常としての役割を果たそうと思う。

被災証明や廃棄物処理の申請に来られた方々も行き来されていた。活動の時間まで漫画展を見てくださるボランテイアさんたちも多くいて、何がしか良いものを届けられていたらと願う。

ここにもたくさんの声が寄せられていた。「10 代の私には、深くてとても分かりにく

かったと正直言えばそうですが、漫画展を通して、共感や理解の部分も多々あり、読んでいると面白く、次の話は何が来て、どのような内容なのだろうかと思い、この漫画展に来てよかったです。」「被災して復旧できずに気軽に気晴らしできるかなぁ～と順路を追ってみました。とっても人間臭くてめんどうで、自分のことでもなければ避けたい状況を丁寧に落ち着いて見せて頂きました。いつか看ることの出来る自他共に豊かな者になりたいですね。」などの声があった。良かった。

漫画トークでは、「その人自身の『変化』だけでなく、周りも『変化する』こと。その両輪がかみ合っていくことが『方向』も作っていくのだろうと思う。その為には各々の気持ちを『掛け声』のように発信していかないと『方向』のずれも生じていくのだろうと思いました。」(50 代男性)、「大変良かった。途中からだったけど、若い人とのお話も聞くことが出来、楽しい時間ありがとうございました。変化を知ることが出来、頑張りたいと思いました。」(70 代女性) などの声を頂いた。さまざまな方が会場に来て、それぞれなりに何かを受け取り、また私たちに返してくださるという匿名であっても暖かい交歓の場となっていることを感じる。

イーストピアの吹き抜けの手すりには再利用した布地で手作りした原寸大の新巻鮭が、大漁旗とともに何十匹も泳いでいた。

遊びプログラム

「アートで遊ぼう」のプログラムは、例年、共催機関である若竹会が準備してくださる。遊びのプロだけあって、いつも私たち自身が楽しみにしているが、今年はスライムづくりだった。たくさんの人々が参加してくれ、院生共々、暖かく楽しい時間を過ごした。かつてのスタッフをしてくれた方々が次々に結婚し、子どもが生まれ･･･と応援かたがた報告に来て、確かな時間を刻んでくださることは有難い。年々、震災後に生まれた子どもたちの姿が増えていく。

「ふるさとの歌や物語を楽しもう」のプログラムは、鵜野くんのアレンジのもと、宮古読み聞かせの会「ぞうさんのミミ」のみなさんによる絵本や紙芝居、手遊びや歌を楽しんだ。

昨年までお願いしていた方の体調不良により、急遽、出演をお願いした「ぞうさんのミミ」は、2001 年に発足し、メンバー13 人で、子育て支援施設、保育所、学童の家などで絵本や童話の読み聞かせをしているボランティア・グループで、「ぞうさんのように耳を大きく広げてお話を聞いてね！」という願いを込めた名前なのだという。この日は総勢 7 名で参加下さった。

家族連れも多く、年齢層も赤ちゃんからお年寄りまでと、最大限の異年齢集団として楽しいひと時を共に過ごした。毎年参加してくれ、すっかり顔馴染みになった参加者も多い。プログラムを通じて、みんな良い表情をして生き生きしていた。多世代で集まることが持つ力をあらためて感じる。

「アートで遊ぼう」には、「子どもたちが楽しそうに創作している様子を見ることが出来て、ほっこりしました。」(30 代女性)、「もうすこしシールを増やしてほしい。今日はビーズやシールを入れたり、はったりしてかわいくできた。また作りたい。」(10 代女性)、「ふるさとの歌や物語を楽しもう」には、「ずい分高齢になっているので、外に出て少しでも勉強させて頂きたく、天気が良ければ出かけてきております。」(70 代以上女性)、「どの企画も面白かったです。ありがとうございました。」(50 代女性) などの感想を頂いた。

## 支援者支援セミナー

支援者支援セミナーでは、今年も家族造形法を使った事例検討を行った。事例提供者だけでなく、院生たちにとっても初めての経験で珍しかっただったようだ。

「はじめて参加しましたが、とても関係性が分かり、先生がお話しされたように、この家族みんなが幸せになってほしいなあと思えることが理解できました。ありがとうございました。」(50 代女性)、「印象的なのは、支援者支援セミナーで造形法を初めて行ったが、本当に面白い考え方と思う。紙以上の情報が３Ｄで確認でき、今後の可能性が拡がった。」(20 代男性)などの声を頂き、院生ともども、みなさんと一緒に家族のことを考え、学ぶ貴重な機会になった。

プログラム終了後は、昨年に引き続きイーストピア所長の齋藤清志さんのお話を聞かせて頂いた。齋藤さんはいつものように穏やかでお元気だったが、今回、これまで協力頂いている人や関わりのある人たちで大きな病気をされている方々が目立った。

若竹会のみなさんも、台風被害もあり、今年はことのほか大変だったとおっしゃっていた。復興途上での度重なる台風被害はことのほか堪えるだろう。ご自身も被災されながら、被災者の支援に奮闘されてきた方々は、とくに、長期に渡る頑張りで無理が祟っているのではないかと心配だ。ゆっくり休養されて、また少しずつでも元気になられることを祈るばかりだ。

11 月 3 日　フィールドワーク

最終日は、宮古市田老地区と上閉伊郡大槌町で震災語り部ツアーに参加した。田老ではいつものガイドさんが明るく迎えてくださる。このあたりも台風被害があって、道の駅も浸水し、そこ痕跡が見て取れた。

今回初めて気づいたが、たろう観光ホテルの駐車場敷地内には、東日本大震災による地殻変動を表すプレートがあった。この地点では東西の方向に 2.18m 移動し、0.31m 地盤沈下したという。最大は牡鹿半島の 5.3m の移動というから、どれほど大きな地殻変動だったのか驚かされる。

たろう観光ホテルは震災遺構として残ったが、大槌町庁舎の方は、遺すかどうか揉め続け、今年 3 月に完全撤去した。残念な気がするが、大槌町庁舎では当時の町長以下、40 人の職員が亡くなったという。たろう観光ホテルでは誰も亡くならなかった。遺族の人たちの気持ちを考えるとやむを得ないとも思うが、壊してしまったものは二度と

元には戻らない。

撤去から８か月経った旧庁舎跡は、クローバー畑となり、三体の地蔵像を配した祠堂が立っていた。

2018 年にオープンした大槌町文化交流センター「おしゃっち」の前でガイドさんと落ち合った。

この場所は、毎年、城山公園から定点観測してきたところで、長く変化がなかったが、一昨年より急に動きが見えたところだ。

震災前、大槌の中核となっていた御社地（おしゃち）周辺にあった町立図書館と町民交流施設の御社地ふれあいセンターをひとつに集約し、御社地にちなんで名づけられたそうだ。

地元産の木材をふんだんに使用した 3 階建ての施設で、2 階には、映像や写真、パネルなどで震災の記憶を伝える震災伝承展示室があり、3 階は約 3 万 6 千冊の蔵書を備えた図書館になっている。

映像を観た後、ジオラマを使ったガイドさんの説明を受け、実際に町を歩いてみる。センターの前の丸い窪みは、嵩上げ前の地面の高さを残していると聞いた。

その後、釜石にできた復興スタジウムを見たいと言う人たちがいたので、ほんの少しの間立ち寄り、毎年恒例となった遠野の古民家を訪れ、民話の語り部、大平悦子さんのお話を聞いた。

『遠野物語』第 99 話を語って頂いた。東北を訪れるようになって、あちこちで何度も聞いてきた民話だ。私の中で、聞くたびごとに思うことが変わっていく。大平さんはこうおっしゃった。

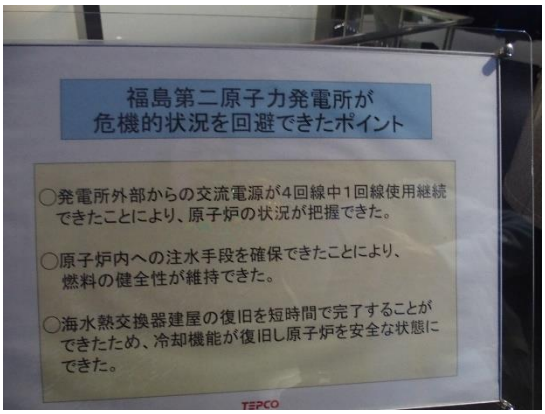
「福二はこのまぼろしを見る必要があったのではないかと思っています」。いつまでも妻のことが忘れられず前向きに生きていくことができない福二に、私はこっちの世界で達者に暮らしているから、あなたはそっちの世界でしっかり生きていってくださいと妻は言いたかった、少なくとも福二はそのように受け止めたのではないか。そんな話を被災者たちから聞いたのだという。

いつものように、手作りの「ひっつみ」を頂き、暖かい気持ちで帰路に着いた。

2019 年福島

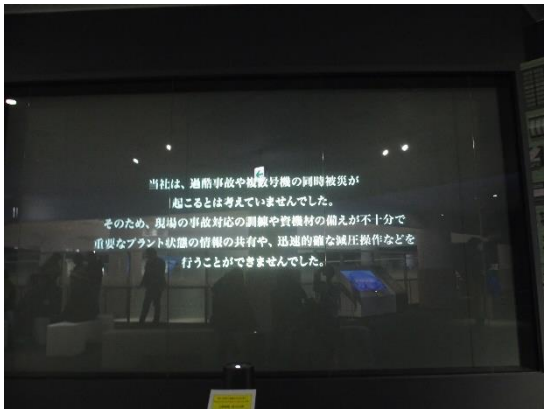
12 月 5 日　フィールドワーク
廃炉資料館

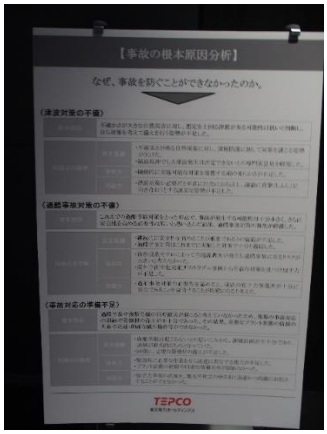
朝、レンタカーで福島駅を出発。沿岸部を目指し 2 時間ほど走って、昨年、富岡町に開設された東京電力廃炉資料館へ。途中途中にモニタリングポストがあり、帰還困難区を出たり入ったりするが、0.9 とか 2.6 とか、さすがに高い数値を示していた。




廃炉資料館は楽しいテーマパークのように見える建物だが、元は PR センターだったらしい。大きなバスが何台も来ている。たくさんの人で、スーツ姿の男性が多く、会社関係で来ているのか。その他、一般のカップルや友人グループもいる。少し話したご夫婦は、群馬からバスで勉強会に来ていると言っていた。

順路は 2 階からのスタートで、上ってすぐのシアターは調整中となっており、事故の状況を伝える展示があった。最先端の技術が使われたわかりやすい説明になっている。全体のストーリーとしては、反省をベースに、精いっぱい対処し、これで食い止めることができたという内容だった。



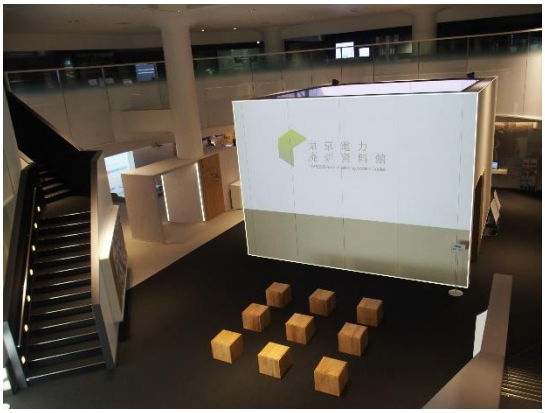

画面には、「当社は、過酷事故や複号機の同時被災が起こるとは考えていませんでした。そのため、現場の事故対応の訓練や資機材の備えが不十分で、重要なプラント状態の情報の共有や、迅速的確な減圧操作などを行うことができませんでした。」という文字が出てきた。

また、自己の根本原因分析「なぜ事故を防ぐことができなかったのか」というパネルには、津波対策の不備、過酷事故対策の不備、事故対応の準備不足が挙げられ、「反省と教訓」のパネルでは、巨大津波を予測することが困難であったという理由で、福島原子力事故の原因を天災として片づけてはならず、人智を尽くした事前の備えによって防ぐべき事故を防げなかった」となっている。

本当は、津波の予測はできていたはずだ。2008 年、福島県が東京電力に対して、津波の想定見直しを 2 回にわたって養成していたことが、福島県の開示文書や東電の社内文書からわかっている。東電は、想定見直しを引き延ばしていた。https://level7online.jp/2019/%e7%a6%8f%e5%b3%b6%e7%9c%8c%e3%80%81%e6%9d%b1%e9%9b%bb%e3%81%ab%e6%b4%a5%e6%b3%a2%e5%af%be%e5%bf%9c%e5%82%ac%e4%bf%83%e3%81%97%e3%81%a6%e3%81%84%e3%81%9f/　そこをごまかしているのは不誠実だろう。

展示は基本的に撮影可能であったが、「反省と教訓」という動画だけは撮影禁止となっていた。かえってなぜなのか奇妙に思う。反省と教訓こそ撮影してでも広めるべきものではないか。疑心暗鬼になって注意深く観たが、音声は「比類なき安全を創造し続ける原子力事業者になることを、ここに決意いたします。」と言ったが、画面の文字には「比類なき安全を創造し続けることを、ここに決意いたします。」となっていた。「原子力事業者」であることを目立たせたくないのだろうか。

15 人くらいの東電社員たちが語る映像があった。2 分くらいだが、入社したばかりだったという女性が当時の様子を語る。40 代くらいの男性は、眼をパチパチさせ涙を浮かべながら語っていた。「東北魂」という言葉が出て、みんな使命感から体を張って頑張ったという内容だった。全部を観る時間はなかったが、ここで語っているのは、おそらく地元出身者と思われるいかにも純朴で人のよさそうな人たちばかりで、胸に訴えるものがある。この方たちの思いとしてはそっくりそのままなのだろう。

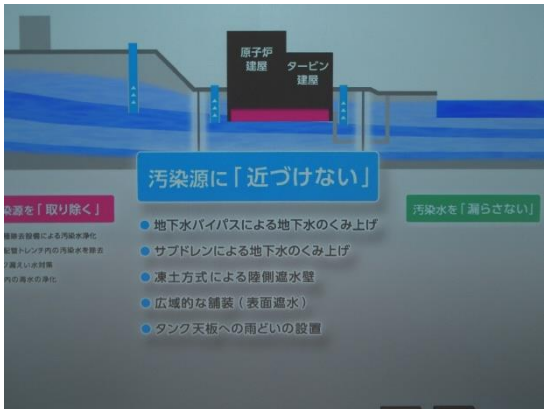


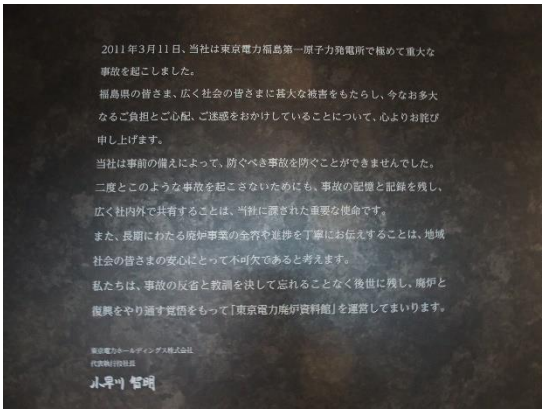
1 階は廃炉への道のりがテーマだが、どこを見ても、具体的なスケジュールはなく、結局のところ、運転停止していた 4 号機をのぞけば、1、2、3 号機とも廃炉に向けての調査段階であるということになる。

労働環境の改善として、マスクなどの機能アップや建屋や道の改善などが示されており、防御服の展示もあった。現在のリスクについてはよくわからない。

最後のあたりは、時間が足りず、さっと見て回っただけになったが、結局のところ、「自分たちは奢っていたが、できることを最大限して、事故を何とかこの程度に食い止めた。その後も、日夜廃炉に向けて頑張っている」というシナリオであるように思われた。

出口には、謝罪の展示があり、「私たちは、事故の反省と教訓を決して忘れることなく後世に残し、廃炉と復興をやり直す覚悟をもって「東京電力廃炉資料館」を運営してまいります」と書かれていた。





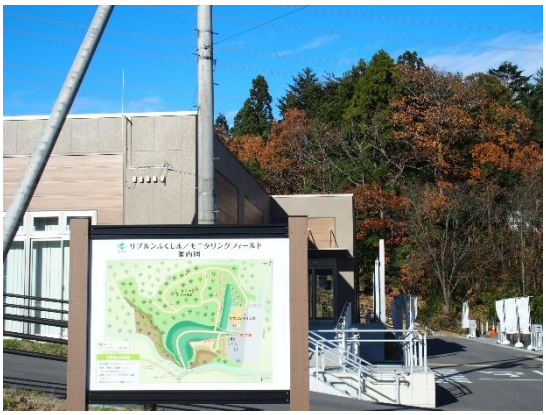
特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま

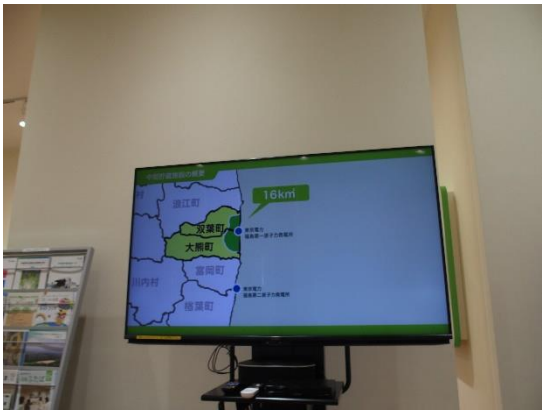
次は富岡町にある特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしまへ。車ですぐである。駐車場で降りると、道路を挟んで目の前に福島第二原発の看板があった。

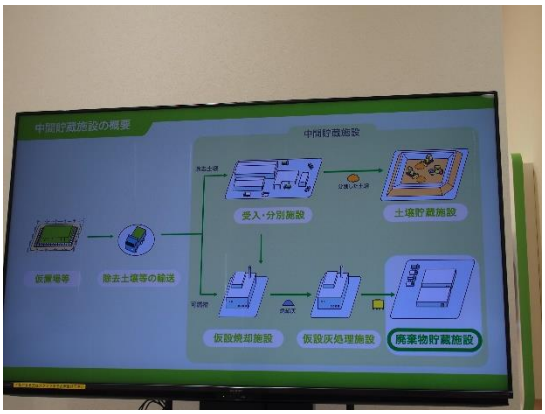
リプルンふくしまは、放射性物質に汚染されたごみの埋立処分について学べる体験型の情報館ということである。若い男性が30分くらいで案内すると、いろいろ説明してくれるが、質問に対しては、あまり答えられない。特定廃棄物はがれきなどのこと、黒のフレコンバッグの耐久年数は3年、入れ替えているのかと言えば、それは自治体に任されているのでわからないということである。

楽し気なゲームがいろいろあり、人間、ブルトーザー、時計を置くと、放射能がどんなふうに避けられるかが示される。少しでも離れるとずいぶん違うし、土をかぶせるとずいぶん違う。時間が経つと、またずいぶん違う。福島の放射線量の変化。これを見ると、年を追うごとにすっかりきれいになっていくように見える。

出口近くには、明るい感じでたくさんの来館者のメッセージが並べられていた。



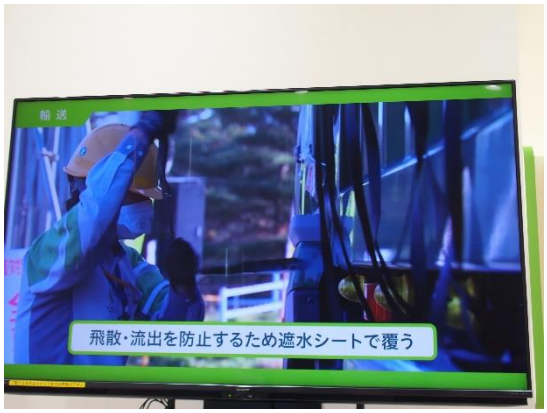


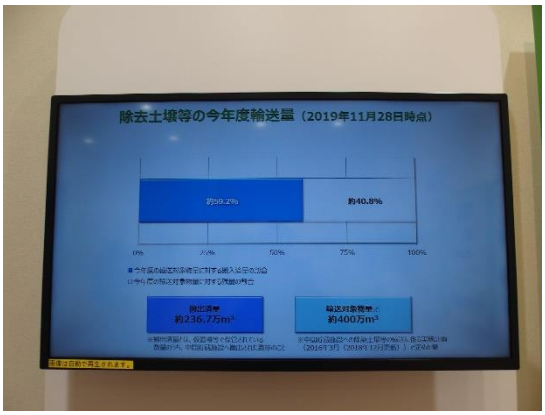



中間貯蔵施設資料館

大熊町に中間貯蔵施設資料館というのがあるというので、立ち寄った。プレハブの簡素な建物である。中間貯蔵とは、放射性廃棄物や使用済み核燃料などを最終処分場または核燃料再処理工場へ運ぶ前に一時的に保管する施設のことで、元産業廃棄物の民間会社が担っている。

入口を入ると、最初に、双葉町と大熊町の文化紹介のパネルがあった。





中間貯蔵施設は、福島県内の除染に伴い発生した土壌や廃棄物等を最終処分までの間、安全に集中的に貯蔵する施設として、東京電力福島第一原子力発電所を取り囲む形で、大熊町・双葉町に整備されている。輸送

対象物量は約 1400 万㎥で、2021 年度までにおおむね搬入完了を目指すとのこと。仮置き場から中間貯蔵施設に搬入されると、除去土壌と可燃物に分けられる。除去同上は土壌貯蔵施設へ。可燃物は、仮設焼却施設、仮設灰処理施設を経て、廃棄物貯蔵施設へ。これらをまとめて中間貯蔵施設と呼ばれる。

道を走っている途中、大きなトラックがたくさん走っていたが、除染土を積んだトラックはゼッケンをつけている。事故があったらいけないので 2 台ずつで行くのだそうだ。

再生利用・最終処理についてのパネルでは、中間貯蔵施設で一時保管された除去土壌等は 2045 年 3 月までに福島県外で最終処分を行うことになっているという。除去土壌のうち、放射線濃度が低いものは再生資材として利用されること、それは土砂やアスファルト、コンクリートなどで被覆され、その安全性は確認されていることが書かれていた。見ていると、だんだん「そうなんだ」という気持ちにされていく。

思い出ギフト館

それから、双葉ギフト館というところに立ち寄る。ここは、がれき撤去作業で見つかった品物を保管し、持ち主に返す「思い出の品展示場」ということである。環境庁の発注で浪江沿岸部のがれき処理を行った大手建設会社「安藤・間（ハザマ）」の運営で、2014 年 7 月、浪江町の（旧）双葉ギフト店に開設された。写真、おもちゃ、位牌、日常用品など約 1 万 5 千点が並べられている。これまで 1 万人が来場し、約 2300 点が持ち主の元に帰ったとのこと。

ひとつひとつの写真やモノに、向こう側にある人々の暮らしと今を想像し、胸が潰れる思いがする。ガレキと一言で片づけられてしまう第三者と違って、地元の方ならではの取り組みである。

後藤忍先生レクチャー

移動しているうちにすっかり日が暮れたが、夜は福島大学の後藤忍先生を訪ねて、レクチャー「原発事故の事実・教訓をどう伝えるか～展示施設と文部科学省『放射線副読本』の動向」を受ける。

震災・事故の教訓を伝える施設は福島県内に複数あるが、そのなかでも、開館準備をしている震災伝承館は、震災から得られた実情と教訓を伝承する施設である。

東京電力廃炉資料館は、もとは PR を行う「エネルギー館」だった。「福島原子力事故の記憶と記録を残し、二度とこのような事故を起こさないための反省と教訓を社内外に伝承する」ことを掲げているが、全体として言い訳に徹し、重要な点が抜け落ちている「エクスキューズ資料館」となっている。たとえば、元の地盤高、津波高さの試算結果の扱い、旧展示を含む安全神話の流布の事例、炉心溶解、震災（原発事故）関連死、裁判等での主張や対応）などについての説明はない。

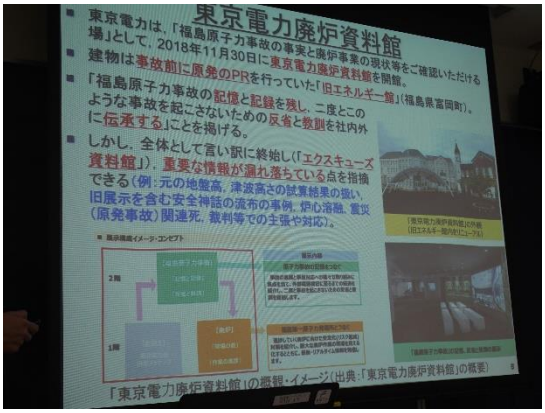
アーカイブ拠点施設となる伝承館の前段階として、インターネットで映像が見れるようになっている。災害や施設の映像の他、県民十名が実名で登場する。「福島の教訓と挑戦を伝えていきます」とあることから、その内容を教訓と挑戦に分類してみると、教訓 21%、教訓と挑戦 38%、挑戦 31%と、やや挑戦に寄っていた。映像資料に登場しなかった立場の人々のうち、事故を起こした当事者（東京電力）、事故対応をした当事者（国、県、自衛隊、消防士、消防団、警察、医療関係者など）、震災関連死の遺族などは、重要な教訓を語りえる人たちなのではないか。

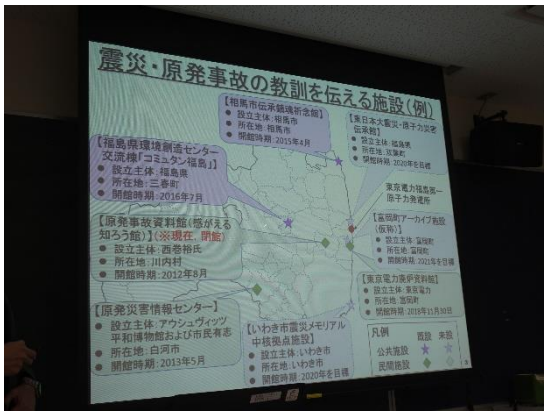
原子力・放射線に関する教材としては、国、福島県教育委員会、福島県教職員組合、福島大学放射線副読本研究会）のものがある。国、文部科学省のものは、原発事故発生前、2010 年 2 月に作成し、事故後には、2011 年 10 月、2014 年 2 月、2018 年 9 月と改訂版を出している。

最新の改訂版には 1 億 8 千万の予算がつけられ、教職員セミナーや出前授業も行うとされる。文科省は改訂のポイントとして、「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」ということで、復興庁（2019）「放射能のホント」の内容が反映され、原発事故を反省する姿勢が後退しているという。

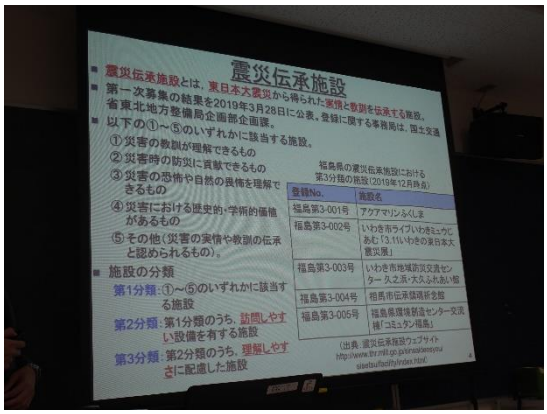
後藤先生の継続的で地道な研究には本当に頭が下がる。大切な作業だし、現実的に影響を及ぼす力を秘めていると思う。院生の質問に、「自分はずるいかもしれないが、病気のことは言わない方針。足元をすくわれることになる。むしろテキストや数値のことだけでも言える。客観的に主張できることのみを扱う」とおしゃっていた。なるほどと思う。

原発事故の事実・教訓をどう伝えるか
～展示施設と文部科学省「放射線副読本」の動向～

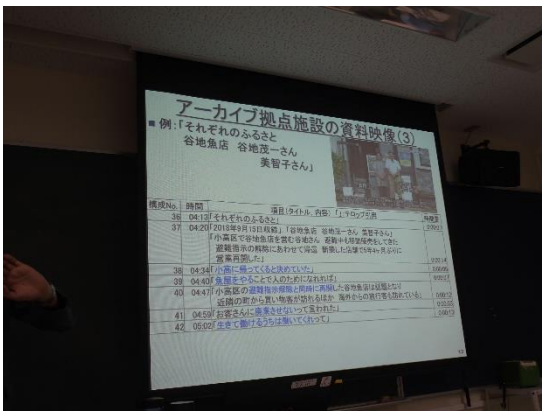

東京電力廃炉資料館
「東京電力廃炉資料館」の概観・イメージ（出典：「東京電力廃炉資料館」の概要）

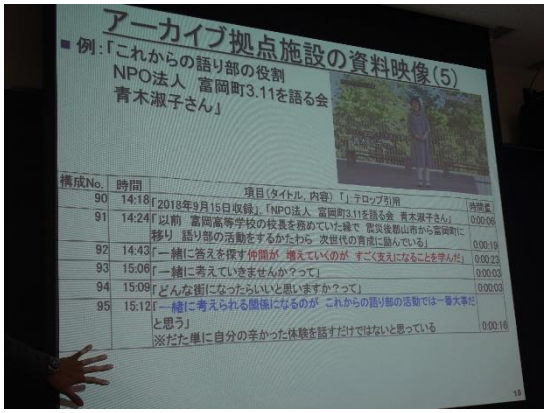

震災・原発事故の教訓を伝える施設（例）

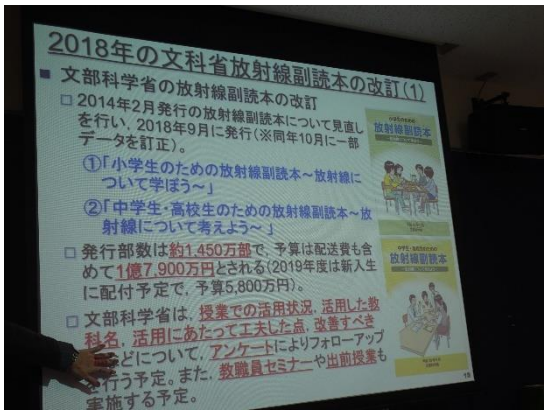
旧エネルギー館の展示例（2）
原子力についての説明
子ども向け体験型アトラクション


震災伝承施設

「伝えたい、福島の記憶とみらい ～アーカイブ拠点施設開所に向けて～」（16分21秒。2019年3月11日公開）
※ダイジェスト版（2分32秒）もあり
災害や施設に関する映像の他、県民10名が実名で登場。


アーカイブ拠点施設の資料映像（3）
例：「それぞれのふるさと
谷地魚店 谷地茂一さん
美智子さん」






12 月 6 日（金）　椏久里珈琲

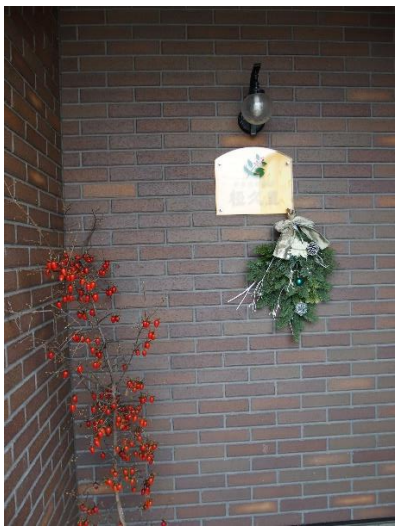
9 時にロビー集合で、9 時半の開館ちょっと前に椏久里珈琲到着。クリスマスの飾りがおしゃれ。みゆきさんが柔らかな表情で迎えてくれる。

みゆきさんとマスターはこの夏、アルザスのニーデルモルシュヴィール、メゾン・クリスティーヌを訪ねたとのこと。そこで 300 種類ものジャムを作っていて、今、日本でも大評判、伊勢丹で買えるのだそうだ。アルバムを見せてくれる。たくさんの果物、市場。楽しそう。

飯舘の椏久里の店は人に貸すことになった。障碍者雇用でベーグルとコーヒーの店になる。ブルーベリーは 2 年続けて放射線ゼロで、今年はお菓子に使った。でも、人に貸すので、片付けに皆で帰ったところ、枯れ葉が詰まった雨どいの掃除をしたら、線量計がピーピー言い出した。お弁当を持って行ったが、みんな無言で食事した。

若妻の翼の女たちもほとんどみんな飯舘に帰った。自分の故郷ってどこなんだろうと考える。この前、フランスの先生に「いつまで避難民の気持ちですか」と問われ、夫は、「飯舘がもとと同じ状態に戻らない限り避難民だ」と答えていた。「そうなのよ。死ぬまで、死んでも避難民。帰らないと言葉に出して言っても、その自分の横に飯舘を思ってる自分がある。夫は逆で、頭の隅で帰っちゃいけないと思いながらも、中心は欲望のまま、毎週火曜に帰る。」自分もいつ、どう変わるかわからない。夫は帰りたがるから、その場合は義母を連れて帰ってねと言うけど、そうすると、病院もデイサービスも何もなくなる。

ただ一言、むごいという言葉に尽きる。原発事故がもたらすもの。たくさんの人々の人生を変えてしまった。二度と取り戻すことはできないのだ。



みんなの家

午前はこむこむで準備をした後、飯坂線で笹谷まで出て、NPO 法人ビーンズふくしまのみんなの家へ。1 時間ほど中鉢さんの話を聞く。

みんなの家セカンドには、新しく F-ぱぱプロジェクトというのができていた。

放射線関連の話題が出なかったので、聞いてみたところ、最近では、台風の話題の方がまだ出るかなということだった。院生たちも質問した。軒先のフレコンバックは今、運び出しをしているところだそうだ。コミュタンへは行ったが、まだ問題が片付いてもいないのに、あれはどうかなと個人的には思っている。沿岸部の博物館について、地元の人はほぼ行かないと思う。帰還困難地区だし、勇気がいるということだった。福島の人にとって、市内と沿岸部ではずいぶん違う感覚なのだと改めて思う。

夜は、こむこむの「みんな de 食堂」。参加している子どもたちとタコ焼器でシュウマイを焼く。なかなかのご馳走で、みんなで楽しく食事をする。20 時前に出て電車で戻る。

宿に帰ってから、ビーンズふくしまが発行している避難体験談集『みんなのひとしずく』の冊子には、避難して福島に戻った方のアンケート結果が載せられていた。福島に戻ってきて感じることに、「いろいろ思うことはあるけど、うまく表現できない・・・。ごめんなさい。」。金銭的に限界になったという理由で福島に帰ってきて、「福島では放射能のことを気にする人は少なく・・・あまり本音では話せません。今でも、福島から離れたいです。温度差があり住みづらいです」、「原発のことを話せる人が少ない」などの声もあった。表に出にくい貴重な声の記録である。

12 月 7 日（土）　プログラム

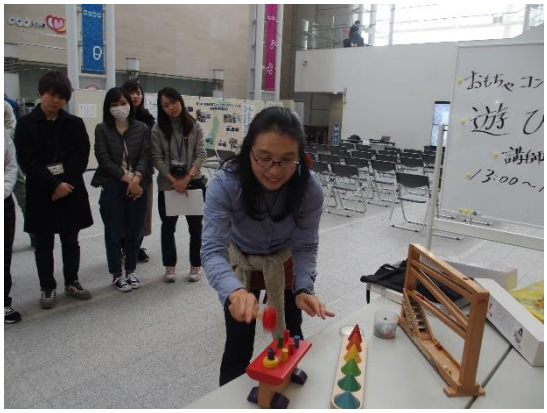
9 時前にこむこむ集合、打ち合わせ後、みなで準備をした。毎年人気のクリスマスカレンダーには、親子合わせると百名を超える参加者があった。それでもたくさんの方々をお断りしたのだ。隅々まで眼が行き届くかどうか心配したが、今年は総勢 18 名とチームメンバーも多く、ビーンズふくしまの協力もあり、何とか無事終了した。

子どもたちのアンケートには、「まいにち、お菓子を食べられてしあわせです。(8 歳男)」「発表の時に説明してくれて感謝している(11 歳男)」「いろんなお菓子があって、なんにちに何をたべるのかが楽しみです。(8 歳女)」「毎日が楽しくなりそうです。来年もこういうきかくがあれば、ぜひ参加したいです。(10 歳女)」「工夫したところや気に入ったとこがたくさんあります。これからの 12 月が楽しみです。(9 歳女)」などかわいらしい声がたくさん書かれていた。中には、「ツリーを作って 3 年目です。今年で終わりですけど、この 3 年間ツリーをつくることは楽しかったです。(9 歳男)」など、2 年目、3 年目と毎年楽しみに参加してくれている親子も目立った。年齢制限を設けているためにこれで終わりとなるが、そんな子どもたちと、またいつの日かどこかで出会えるといいなと思う。

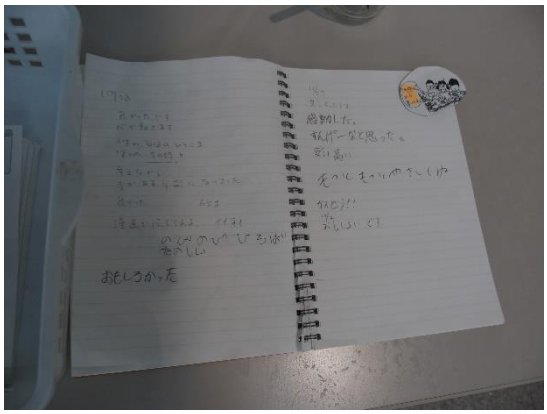
保護者のアンケートには、「久しぶりに子どもとゆっくり工作することが出来ました。色々な材料を用意していただき、とても楽しく過ごすことが出来ました！ありがとうございました！！(40 代女)」「息子と一緒に作るの、とても楽しかったです。かわいいお菓子や飾りの素材など、一人っ子の息子に一から沢山用意してあげるのも大変で、家で作ろうと思ってもハードルが高いのでこの様な機会があってよかったです。(30 代女)」「なかなかモノづくりに参加したことや機会がなく、子どもも積極的にやりたいと言った事がなかったので、今回初めて参加して、楽しいと思えたようで、親としてもうれしかった。また、参加してみたいと思いました。」など、親子で楽しいひと時をすごした様子や、「息子は制作が苦手で、上手にやらなくては・・と焦り、他人と比べてしまうことが多く、実際ツリーの形を作る時点で表情が曇っていました。でも立ち直り、手直しをしなくても自分の書いたツリーの形で大成功できたこと、自信につながっていると思います。失敗と思っても大丈夫と前向きな子になって欲しいので、今日とてもいい経験でした。(40 代女)」と子どもの成長を見守る親の眼差しを知ることができ、暖かい気持ちになった。

それから、おもちゃコンサルタント小磯厚子さんによる遊び講習会。院生たちの勉強になったようで、とくに臨床心理士を目指し「プレイセラピー」を学ぶ院生たちが日頃の実践を反省とともに振り返ってたことが印象的だった。

遊びコーナーには、「楽しい企画でした。(40 代男)」「家でカプラを作ってみたいと話していたところだったので、こちらで実際体験できてうれしかったです。他にも様々なおもちゃのことが知れて貴重な機会をありがとうございました。(40 代女)」などの声が寄せられた。



漫画展には、「3 世代よりも前のこと、ルーツ知らないこと多いですね。個人的には力が入っていること→抜くの話にドキッとしました。上手に抜けるように。ありがとうございました。(40 代)」「とても良いです。さいこう　OK（50 代)」「とても優しい絵で、思わず立ち止まって読んで見ました。とてもあたたかい話でした。(40 代)」などの声があった。漫画トークは、「心を支える（回復)」と「心を鍛える（成長)」をめぐって話が展開されたが、「長崎出身で心理職をしています。震災支援でこちらに来ました。＜木陰の物語＞は学生だった当時長崎で知りました。今回、団士郎先生のお話を直接聞く機会を持ててとても嬉しく思います。このプロジェクトが続くよう応援しています。本日はありがとうございました。（30 代女)」「こころのケアについて学んでいる立場から聞いたので、新鮮だった。教育者の視点とこころのケア的な視点のバランスがうまく取れたらよいと思った。(20 代女)」「先生の言う通りです。社会が変わらないと社会を変えるには、一人ひとりの力だと思います。誰かが変えてくれるのではないということ、自分がどう行動するかですよね。(50 代女)」「笑ったり、涙したり、心和む時間になりました。ありがとうございました。(20 代女)」などの声があった。9 年目にして各プログラムが定着しつつあることを感じ、私たちの応援の気持ちが何がしか届いていることを願う。



藍原寛子さんレクチャー

福島民友記者を経て、現在、フリージャーナリストとして活躍されている藍原寛子さんをお招きした。今回は、個人的な体験もいろいろ聞かせてくださった。

福島第 1 原発の事故は突然起こったわけではない。小さな事故は、藍原さんが福島民友に入社した 1990 年には普通にあった。1999 年の JCO 事故の際には、茨城県東海村の方が福島県いわき市まで避難してきたこともあった。

原発事故の取材にあたって、記者仲間で話したところ、民友、民報にはマニュアルがなく、共同通信社と読売新聞社ではマニュアルを作成していたが、その内容は大きく異なっていた。共同通信は「なるべく遠くから」、できれば電話で、読売新聞社は「できるだけ近くで」取材を行うとなっていた。共同通信のマニュアルを使うことになった。

また、記者としてサイトに入った時のこと、朝日の記者が自社のガイガーカウンターを持っていて、他は東電のを借りた。朝日のだけが大きな警戒音を鳴らし、見えなくても本当に放射線があるのだと実感した。ガイガーカウンターを作るプロジェクトをしている地元の中小企業があるが、放射能は目に見えないだけに、「放射能がある」ということを知ることが武器にもなる。

福島市内にある藍原さんの自宅にも汚染土がある。震災から 2 年半たってようやく除染ができたが、記念樹を切らなければならなかった。それは今も庭にある。平場に置くか、庭に埋めるかの選択があるが、藍原さんはそこにあることがわかるように平場に置きたかったが、両親は見たくないということで埋める選択をされたそうだ。

ハワイで保養に関わっている人から、保養についての質問が出た。無料でハワイに行けるというのに、応募が少ないこと、これ以上分断させないでくれと言われたそうだ。藍原さんは、ニーズはあるし、自分は必要性を認めている。行った親子がのびのび不安を話せることがいいと思うということだっ

た。福島市内の人もあの頃の経験を話そうとしない。忘れてしまったり，思い出したくないと思っている人が多い。難しい問題だ。

12 月 8 日(日)　飯舘村フィールドワーク

最終日には、昨年に引き続き、NPO 法人福島地球市民発伝所（福伝）の竹内俊之さん、藤岡恵美子さんの案内で飯館村へ行き、元酪農家の長谷川健一さんのお話をお聴きする機会を得た。

飯舘村に向かう車中から見える大量のフレコンバック。昨年と違うのは、道路から見えないように白い柵がしてあること。来年開催される東京オリンピックのためだという。今年も、地域交流館きこりの研修室を借り、長谷川健一さんを主人公にした『「牛が消えた村」で種をまく−〜「までい」な村の仲間とともに』の写真絵本を輪読し、順番に自己紹介と感想を話していった。そうしているうちに長谷川健一さんが到着した。

まず、飯舘村の案内をして頂いた。長谷川さんは、そばを作っているということで、そば粉を売っている道の駅に寄る。天井からたくさんの植物がぶら下がり、華やかな雰囲気。花や野菜もたくさん売っていた。役場は改装中で、お金をかけた彫像などが新たに出来ていた。村内のあちらこちらにフレコンバックが積み重ねられ、帰村をあきらめた村民の家が解体されつつあり、もとは畑だった広大な敷地を利用した大量の太陽光発電、そして更地が見える。悲しい風景だ。

いいたて村
のそば粉
前田明神
そば粉
¥600

長谷川さんと仲間 3 人は、そばをやろうと、もとは牛舎だったところをそば工場にした。1 億円以上の巨額な助成金を得て、機械や車を入れたが、利益を上げることは不可能である。それでも、復興のためにではなく、土地を維持するためにやっている。この辺りは、35 年前、祖父や父たちがみんなで開墾した土地。それがまた荒れた山になっていくのを見たくない。そばは売れないし、生業にはならない。ただ畑を守りたいだけ。復興の旗印になるつもりはないので、マスコミは拒否しているとのことだった。

「それでも私は、農地でそばを作ってここでのびのびして生きたい。それが一番好きな生き方だ」とおっしゃった。高齢者は戻ってくると思っていたが、誰も戻ってこない。便利さに慣れたのか。長谷川さんのお母さんは、役場前のケアセンターで世話になっているそうだ。

きこりに戻り、お弁当を食べながら、震災前の 2008 年に制作された DVD「飯舘村 50 年の歩み」を観た。村民が協力し合って村を発展させていった様子がよくわかる。

新春ほら吹き大会から実現した平成元年から 5 年間、村の若い妻たちをヨーロッパ研修に派遣した「若妻の翼」事業のことも紹介されていた。かねてより興味があったので、「村の男たちはどんな反応だったんですか」と尋ねてみると、「それを支える者はたしかに大変だったけどな」と笑う。「でも、海外に行くのは良いことだ。自分もドイツやあちこち行って、ジャパンのジの字も出ない。国内にいると井の中の蛙になる」としみじみおっしゃった。

藤岡さんがインタビューする形で、長谷川さんの話を聞く。安全を主張して、不必要

に村民の被曝量を増やした研究者がいた一方、村内の汚染状況を調査し、いち早く避難を村長に提案した研究者がいた。菅野村長は避難を勧めなかったが、自分の孫は早々に避難させていた。長谷川さん自身は、JCOの事故の時に、ほうれんそうと牛乳が汚染されたことを知っていたから、直観的に、3月17日に孫を避難させたそうだ。それでいて、ADR のさいには、「避難が遅れて被曝したのは自己責任。牛がいるから避難できない」などと言われ、怒り心頭である。

飯館村の活気のある以前の村の映像を見た後だけに、美しく、人が支え合い、笑い合っていた村が奪われてしまったことの理不尽さに言葉を失う。長谷川さんは、何度も「放射能災害はすべてのものを奪う」「再興はできない」「あの飯館村はもう戻らない」とおっしゃっていた。そんななかで、今できることをやり続けておられる長谷川さんにはただただ尊敬の念を抱く。

毎年、自分たちが福島に身を置き、みなさまの声を聴かせて頂きながら、そこにあるたくさんの声なき声と辿り切れないほどの複雑な力動を体感する。狂気の時代と、そこを生き抜く人々の優しさと逞しさ。行ってみなければわからないことがたくさんある。このプロジェクトも来年の十年でひと区切りとなるが、とても区切りなどつけられそうもない福島の現状に、私たちに何ができるのだろうと自問する日々である。

つづく